セーラームーンRPG⑧

MMG5

深森薫

大陸を貫き、西へ東へ人や物を絶えず運び続ける『銀の街道』。
人々の営みは、永い時を経てこの大陸に幾つもの町を築き上げた。人智の及ばぬ未開の地が広がる世界にあって、町は人々の暮らしの主要な舞台である。その中にはより多くの人口とより多くの機能を備え、都市国家として栄えるものも現れた。これらの都市国家は『銀の街道』をはじめとする多くの街道で結ばれ、各々が競い合うように独自の個性を主張するようになる。
ここドンロンも、そんな都市国家の一つだ。目抜き通りを人の群が絶えず往来し、広場には屋台が建ち並ぶ。飛び交う物売りの声、鼻孔をくすぐる肉の焼ける香ばしい匂い。荷物を山と積んだ大八車が石畳に揺られ、がたがたと音を立てて走ってゆく。街全体が、混沌とした雑多なエネルギーに溢れていた。そして、『銀の街道』を旅してたった今この街に辿り着いた冒険者の一行が、その目抜き通りを歩いている。
「冒険者の店に着いたら、まず仕事を探さないと」
そう言ったのは、マーキュリー。冒険者、という言葉のイメージからはかけ離れた、線の細い白皙の美女である。ラベンダー・グレーの法衣に智神ラーダの聖印を首から下げたその出で立ちは神官、しかもそれなりに位のある者のそれだ。
「できれば手っ取り早くて実入りのいい仕事を」
だが口から出てくる言葉は非常に生臭かった。
「手っ取り早くて実入りのいい仕事なら、あたしの出番ね」
ヴィーナスはふふ、と笑うと、ブロンドの長い髪を得意げにかき上げ、天青の瞳を輝かせた。その

容姿とは裏腹に、黒革の上下に身を包んだ出立ちは盗賊風。
「これだけ沢山人がいれば、お財布スリ放題じゃｎ」
　ごっっ！
「そういうの駄目だっつってんでしょ」
　ヴィーナスの額に瞬速で肘打ちを叩き込んだのはマーズ。口より先に手の出る彼女は、いかにも魔術師らしい黒ローブに身を包み、人目を避けるように昼間から黒フードを目深に被っている。あまりにも顔が整いすぎているがために、そうしなければ衆目を集め、噂が噂を呼び、面倒なことになるのが目に見えているからだ。
「まあまあ。いざとなったら、街の外でキャンプすりゃいいじゃん」
　そう取り成すのは、ジュピター。板金鎧にマントを羽織った、長身の戦士。肩を竦める仕草にあわせて、栗色のポニーテールが揺れる。
「また、あたしが雉でも鹿でも狩るからさ」
　背中に負った得物は大振りのバスタード・ソードだが、傭兵生活の賜物でどんな武器でもお手の物。ついでに狩猟と料理の腕も抜群である。
「えぇ……せっかく街に着いたのに」
　ダメージを受けた額を掌で撫でながら、ヴィーナスがぼやく。
「ジュピターの料理は悪くないけど、ふかふかのお布団で寝たいな……」
「今日明日の宿代は何とかなるとして、このままだと明後日の宿は一番安い大部屋の相部屋で雑魚寝

になるわね」
　私はそれでもいいけど、と、パーティーの財務を一手に引き受けるマーキュリー。職業柄なのか、清貧生活への耐性が意外に高い。
「それだけは勘弁。何が何でも稼ぐわよ」
　マーズの声に気合いがこもる。貧乏生活への耐性が一番低いのは恐らく彼女だろう。
「ってか、人多すぎだろ」
「表通りだものね」
　道幅が立ち並ぶ屋台のぶん狭くなっている上に、とにかく人が多い。皆が押し合いへし合いしながら、自分の思う方向に進んでいく。ぼんやりしていたら、思っているのとは全く違う方向に流されてしまいそうだ。
「あっ……！」
　一行の横を歩いていた人物がまた一人、人波に押されて、パーティーの一番後ろを歩くヴィーナスの肩にぶつかった。キャメルのフードを目深に被っているが、その声から女だとわかる。
「『久しぶりね、ディーテ』」
　女は、ごめんなさい、と告げて体を離す前に、ヴィーナスの耳元で彼女にだけ聞こえるようにそう言った。
「――！」
　その瞬間、ヴィーナスは目を見開き息を呑んだが、その動揺を仲間に気取られぬよう、すぐに平静

を装う。
フードの女の姿は、いつの間にか人波に紛れ消えていた。

＊

時は真っ昼間、他の冒険者パーティーは仕事に出かけているのだろう。冒険者の店『歌う牡蠣亭』は閑散としていた。冒険者の店が普通のレストランと違う点の一つは、店内に冒険者への依頼内容が書かれた木簡や羊皮紙を掲示していることだ。その内容は、薬草の採取から大掃除、隊商の護衛、モンスター討伐まで多岐にわたる。
「飼い犬の捜索、逃げた荷ロバの捜索、迷子の捜索……何だか捜し物が多いわね」
手っ取り早く実入りのいい仕事を求めて掲示を物色していたマーキュリーは、一件の依頼に目を留めた。
「……？　これって……」
「……妙ね」
共に依頼を吟味していたマーズが、彼女の示した木簡を一目見るなり眉を顰める。
「地下水道のラット退治なんて、駆け出し冒険者の仕事じゃない。何よ、この報酬額」
大きな街の地下水道には、ジャイアント・ラットと呼ばれる巨大なネズミが棲み着くことがある。放っておけば爆発的に増え、糞尿が環境を悪化させるだけでなく、人間を噛んだり引っ掻いたりする

ことで病気をうつす可能性もあるので、大抵の場合冒険者に駆除が依頼される。この手の仕事は、どの街でもよくあるものだ。

「八千フロルって、いくら何でも高すぎでしょ」

「相場の五倍以上ね。それに、何度も書き換えられてる」

「ああ。その依頼はな」

割って入ったのは、この店の主だ。刺青だらけの丸太のような太い腕と、大きな傷跡のあるスキンヘッドが印象的な強面の男。恐らく、冒険者上がりだろう。これも冒険者の店にはよくあることだ。

「最初に受けた駆け出し冒険者のパーティーが戻って来なくてよ。んで、そいつらを探しに行った奴らも行方不明になっちまって」

「何だよそれ。大事件じゃないか」

ツッコんだのはジュピターだ。

「それからみんなビビっちまって、引き受け手がいなくてな。報酬がどんどんつり上がって今その額だ。依頼主はお役所だが、もし行方不明になったヒヨッコ共の行方が分かれば、その報酬に千五百、俺が個人的に上乗せする」

店主はそう言って、パーティーの面々を一人ずつ、値踏みするように見た。

「どうだい。あんたら、見たところ相当腕が立ちそうだが」

「……へぇ。中々見る目あるね、おっちゃん」

ヴィーナスがにやりと笑う。

「どうする？」
マーズはマーキュリーを見た。彼女がこういう態度を取るのは、乗り気な時だ。そうでなければ、端(はな)から切り捨てている。
パーティーの知恵袋は、暫し思案し、引き受けましょう、と頷いた。

曰く付きの案件の引き受け手が現れた、とあって、当局の役人がすぐにすっ飛んで来た。末成(うらな)りのキュウリのようにひょろっとした頼りない風貌の青年は、一行を見るなり暫くあんぐりと口を開けて言葉を失った。『冒険者』が待っていると聞いて来てみれば、顔のいい女が三人も待ちかまえていたのだから、まあ無理もない。ちなみにあと一人は黒フードを目深に被って顔を隠した不審者だ。
「え、えっと……こちらが入り口です」
地下水道の入り口は、裏通りの人目につかない場所にあった。一見古井戸のようにも見えるが、分厚い鉄の蓋で塞がれ、鍵もしっかり掛かっている。地下水道は地下深くを走っており、素人が誤って落ちてしまえば少々の怪我では済まない。また、水道は街の地下に縦横無尽に張り巡らされており、迷ってしまったらそう簡単には出られない。色々な意味で、危険な場所なのだ。
「ふんっ……！」
青年役人は持参した鍵で解錠すると、気合いの声とともに蓋を開けた。ペンより重い物を持ったことのなさそうな青年には、鉄の蓋は文字通り荷が重いようだ。

「お、お気をつけて……！」
次々に地下に降りてゆく冒険者たちに、青年は声をかける。真っ暗な地下では流石に邪魔になると感じたのか、マーズが梯子に足をかけようとしたところで目深に被っていたフードを取った。
「――っ!?」
青年は固まった。どこからどう見ても不審者でしかなかった人物が実は超絶美女だったのだ、無理もない。
「ああ、そうだ。ちょっと貴方」
しかも話しかけて来たではないか。
「っ、ひゃい!?」
青年の声が裏返る。
「一般人が間違って入ってきたら不味いから、全員が一番下まで降りたら鍵を掛けて頂戴」
「はっ、はいっ！　……え？　で、でも、それじゃあ」
「問題ないわ、この程度の鍵なら中から魔法で開けられる。あと、どのくらい時間がかかるか分からないから、貴方は帰ってていいわ。ここに居て貰ったところで、貴方に出来そうなこと、特に無いし」
「あっ、はい」
青年は、結構失礼なことを言われているにもかかわらず、あまり悪い気はしていなかった。黒髪吊り目の超絶美女にはむしろ似つかわしい物言いであるとすら思える。

「……皆さん、どうかご無事で」
パーティー全員が穴の底にたどり着いたことを見届けて、青年は言いつけ通り、入り口の蓋を閉め、鍵を掛けた。

「うわぁ、くっさぁ……」
先頭をヴィーナスが思わず顔をしかめた。
「まあ、そのうち慣れるわ」
ぼそりとマーズが言う。
「そうね。同じ匂いを嗅ぎ続けているとすぐに感じなくなるけど、それは、既に得た情報よりも次の新しい情報、例えば天敵の匂いといったものに備えるために必要なことで、生き物としての生存戦略なのよ」
マーキュリーがどうでもいい蘊蓄（うんちく）を披露し、
「はは…。ま、通路があって、ドブの中を歩かなくていいんだから、まだマシじゃん」
ジュピターが何となくまとめる。この四人の、お決まりの会話の流れだ。
魔法の明かり――短剣に『光明（ライト）』の魔法を付与したもの――を手に、ヴィーナスが先頭を進み、その後ろに魔法使い二人、そしてカンテラを持ったジュピターがしんがりを務める。洞窟や遺跡を探索する時の、これもお決まりのやり方だ。

「……おかしいわね」
暫く進んだ所で、マーズがぼ眉を顰めた。
「ラットに出会うどころか、気配も感じないなんて」
「そうね。少なくとも、役所が最初に依頼を出した時点では、駆除が必要と思われる程度にはラットがいた筈」
マーキュリーも違和感を口にする。話し方がゆっくりなのは、彼女の頭脳がフル回転しているということだ。
「仮に、先に入った冒険者パーティーが倒したのだとしても、死体が残っていないとおかしいわ」
「……ラットの気配は感じないけど、さ」
一番後ろを歩いているジュピターが言葉を挟んだ。
「なんか、こう……変な感じ、っていうか。誰かに後を付けられてるような気がすんだよな」
「はぁ!?　ちょっとそれ早く言いなさいよ！」
「いや、それが、イマイチはっきりしなくてさ。あたしの勘違いかもしれないし」
マーズにキレられて、たじろぐジュピター。
「ヴィーナスは？　何か感じる？」
「っ…ううん。あたしは、別に。何も」
ほんの一瞬、間を置いて、ヴィーナスは小さく首を振った。
――しーん――

「あ。なんか気配が消えたぞ」
「さっきはよくわかんないとか言ってたじゃない」
「や、こうして静かになってみると分かるよ。さっきのはやっぱり人間の気配だった」
突っ込むマーズに、間違いない、と頷くジュピター。
「……入り口には、鍵がかかってる筈よね」
どこかぼんやりとした口調で、マーキュリーが問う。新たな問題の発生で、賢者の脳みそは大忙しだ。
「ああ。確かに、鍵を掛ける音がしたよ」
最後に穴に入ったジュピターが答える。
「ということは、可能性は二つ。まずは、最初からこの地下水道にいた人間、例えば行方不明の冒険者ね。だけど」
「それだったら、助けを求めてくる筈ね。それに」
腕組みをして、マーズも頭を捻る。
「こっちが気付いた途端、気配が消えたのも腑に落ちないわ」
「ええ。だから、その線は薄いわね。それで、もう一つの可能性は、私達の後で、入り口の鍵を開けて入ってきた。それができるのは、まず、さっきの役人さんだけど」
「だったら声かけてくる筈だよな」
来た道の奥を睨み、警戒しながらジュピター。

「まあ、用があってもまず来ないでしょうね。だとすれば」
マーズの表情が険しくなる。
「鍵がなくても鍵が開けられる、魔術師か盗賊。恐らく、何らかの意図を持って私達の後をつけている……手柄の横取りを目論んでいるとか、私達に恨みがあるとか」
ずっと押し黙っていたヴィーナスはひゅ、と小さく息を呑んだ。
「……折角だから、一寸だけ相手をしてあげましょうか」
マーキュリーはそう言って、足下から小石を一つ拾い上げると、
「『万物の根元マナ、此の礫に宿りて、現し身を成し、仮初めの命を与えよ』」
古代語の呪文とともに両手で複雑な印を切り、通路の横を流れるドブ川の中にぽい、と小石を放る。石は見る間に膨張して、人の大きさと形を成した。魔法の力で生み出された、ストーンゴーレムである。
「『我、汝に使命を与えん。水中に隠れ潜み、此の場所を通り過ぎんとするもの全てを水中に引き込め』」
彼女が古代語で命令すると、ゴーレムはざぶざぶとドブの中へと入り、小さくうずくまった。
「これが通用するような相手ならいいけどね」
肩を竦めて、マーズ。
「そうであることを祈りましょう」
「それはいいけど。こいつ、あたし達が戻ってきた時に攻撃してこない？」

ジュピターが尋ねる。もっともな心配だ。
「大丈夫よ。その頃には魔法の効力は切れてる筈だから」
汚水の中で膝を抱えてちんまりと座るゴーレムを残し、一行は地下水道の奥を目指して再び歩き出した。
「……言ってくれれば、ストーン・サーバントくらい私が作ったのに」
歩きながら、マーズが少し不服そうに言う。マーキュリーの本業は神官。古代語魔法の心得は、本人曰く『嗜み程度』で、このパーティーにおいて古代語魔法は基本的にマーズの領分だ。
「マーズにはまだ精神力を温存しておいて欲しいの。もし私の読みが正しければ、この後大活躍して貰うことになるから」
「ん？　じゃあ、うようよ居た筈のネズミが一匹もいない理由とか、マーキュリーはもう分かってんの？」
ジュピターの問いに、マーキュリーはええ、と頷いて、
「でも、まだ確証はないの。間違った先入観を持って行動するほど危険なことはないから、今はまだ」
言えないわ、と、人差し指を唇に押し当てた。
ばしゃーん！
不意に、遙か後方から水音が聞こえて。
「……どうやら、通用したみたいね」

マーキュリーはふふ、と悪戯ぽく微笑んだ。

＊

役人の話によると、この地下水路には、点検や掃除、修理といった作業のための小部屋が幾つか作られているということだった。
「この先が、少し広い空間になっているようね」
図面を見ながら、マーキュリーが言う。
「割と新しい街だからかしらね。ちゃんと通路があるし、水路そのものも大きくて、大量の水を流せるようになってる。よく考えて作られていると思うわ」
と、不意に先頭を歩いていたヴィーナスが足を止めた。
「ヴィー？」
「しっ！　何かいる……何？　この音」
一行は息を殺して耳を澄ました。
音の出所は、正面の広間だ。ずっ、ずずっ、と、何か重い物を引きずるような音が、確かに聞こえる。
「マーズ！　明かりを！」

マーキュリーが叫んだ。
「『光の精霊、ウィル・オー・ウィスプ、我が導きに応え』」
マーズが素早く呪文を唱える。古代語魔法のそれとは全く異なる音韻と旋律を持ったそれは、精霊への呼びかけだ。
「『集いて――闇を払え！』」
突如、巨大な光球が出現し、広間の中を照らし出す。眩しいと感じたのは一瞬、冒険者達の目はすぐに光に慣れ、音の正体を捉えた。石造りの床が、うねうねと波打つように動いている。
「うわぁ！　キモっ！」
あまりの不気味さに思わず跳び退くヴィーナス。
「っ！　大蛇（パイソン）か！」
ジュピターは素早く前衛に躍り出て剣を構えた。
「……って、なんだこりゃ!?」
大蛇は一匹ではない。何匹もの大蛇がそこら中でとぐろを巻いており、足の踏み場もないほどである。突然現れた強い光が不快なのか、あるものは落ち着き無く体をくねらせ、あるものは不機嫌そうに頭を隠そうと胴体の下に突っ込んだ。
「成程。温存しろって、こういうことだったのね」
不気味な光景に眉を顰めつつ、マーズは印を切った。
「『闇の精霊、シェイド、我が導きに応え』」

黒い霧のようなものが、小部屋の中に立ちこめる。
「『集いて――』」
霧は次第に黒さを増し、大蛇の群を包み込んで、
「『――漆黒の深淵となれ』！」
やがて一点の光もない純粋な黒となり、次の瞬間、不意に雲散霧消し。
同時に、一切の音が消えた。
闇の精霊魔法は、生物の精神に影響を与える。闇の精霊に直接触れた生き物は、底知れぬ恐怖を感じ、精神力を削られ、場合によっては失神する。人間や妖精族と違って、理性を持たない動物は特に精神の働きが弱く、獰猛な大型獣でも簡単に気を失って倒れてしまうのだ。
「おー。いつもながらお見事」
「じゃ、後はよろしく」
茶化すジュピターに、マーズはにべも無くそう言って後ろに下がった。
「へいへい」
精霊魔法で大蛇の群は無力化されたが、あくまでも失神しているだけである。首を切り落としてとどめを刺すのは、ジュピターとヴィーナスの仕事だ。
「うっわ、めんどくさ……頭どこにあんのよ」
とはいえ、とぐろを巻いて密集している大蛇の頭を探すだけでも一苦労である。
「とりあえずぶつ切りにしときゃいいだろ――」

ふと、ジュピターは手を止め、
「……マーキュリー。いなくなった冒険者の中に、魔術師って、いたかな」
沈んだ声でそう問いながら、大蛇の体の下から一本の杖を拾い上げた。
「いたわ。最初のパーティーが、戦士と、魔術師と、マーファの神官。後から入った二人が、戦士と盗賊」
「……そういうことか……」
「あたしも見つけた。たぶん、盗賊の短剣ね」
ヴィーナスはそう言って、拾い上げた剣をぽい、と放った。
「ヴィー！」
不意に、マーズが声を荒げる。
「粗末に扱うんじゃないわよ！　人様の遺品でしょ！　丁寧に扱いなさい！」
あまりの剣幕に、ヴィーナスは一瞬目を丸くして、ごめん、と呟いた。
「……神官の遺品だけ、見つからないな」
額の汗を拭いながら、ジュピターは溜息をついた。大蛇の体の下から見つかったのは他に、長剣が二本と、くしゃくしゃに潰された金属鎧。神官の持ち物と思われるものだけは、発見できなかった。
「神官の持ち物で残ってそうなもの、って、何だろ」
「聖印、かしらね」
ジュピターの呟きに、マーキュリーが答える。

「大抵の神官は首から聖印を下げているし、大抵の聖印は銀製よ」
「……それなら、蛇の腹ん中に残ってるかもしれないな」
ジュピターは気を取り直すと、大蛇の腹に剣を突き立て、縦に切り裂いた。
「うっわぁぁっっ!?」
これまで聞いたことのないようなジュピターの悲鳴に、皆が振り返る。
「何!?」
「どうしたの!?」
「――来るな！　……っ、みんなは、見ない方がいい」
ジュピターは大声で仲間を制すると、自分を落ち着かせるように深い呼吸を一つして、震える声を絞り出した。
「たぶん、これ……人間の、子供だ。かなり……その、溶けかけてるけど」
そして、もう一度深く、長く息をすると、自分の羽織っていたマントを外し、どうにか人の形を保っているその遺体を丁寧に包んで、
「……拝んでやってよ」
後ろに控えていたマーキュリーの元へ運ぶと、石の床にそっと安置した。
彼女は無言で頷くと、小さな亡骸の前に跪き、胸の前で印を切って祈りの言葉を捧げる。
「――人の身これ儚きものにて、誰しも、その魂を肉体に宿らせ現し世に生を受け、瞬く間に滅び、魂一つに戻るものなり」

その言葉は、共通語だった。神官が神の奇跡――魔法を用いるときの言語は神聖語と呼ばれる特殊なものだが、葬儀や婚礼の時には、広く一般の人々が理解できる地方語や共通語で祈りが捧げられる。

「我や先、人や先、今日とも知らず、明日とも知らず、持つ者も持たざる者も、貴なる者も賤なる者も、一期の夕べには皆等しく白骨となれり――」

暗い地下水道で、冒険者たちは暫し頭を垂れ、幼い犠牲者のために祈りを捧げた。

「……地上に戻りましょう」

祈りを終えたマーキュリーは、開口一番そう言った。

「街の地下にこれだけモンスターがいて、市民の犠牲者が出ている以上、これはもう一介の冒険者ではなく騎士団の仕事だわ。それに何より、この子を早く親元に帰してあげないと」

＊

地下水道から戻った一行が冒険者の店で夕食にありつけたのは、宵の口をとうに過ぎた頃だった。

「かーっっ！　沁みる！」

ジュピターはチキンレッグを骨まで噛み砕きそうな勢いで喰らって、エールを一気に流し込んだ。

「……よくそんなに入るわね」

フォークで人参をつつきながら、少しうんざりしたように、マーズ。

「っひぇひふは……みんなが小食すぎんだろ」

「あのグロい現場から戻ってきて普通に食べれるあんたがおかしいわ」
余程気疲れがしたのか、ツッコミにいつものキレがない。
「そうね、思った以上に色々あったし」
そう言うマーキュリーも疲労の色は隠せず、肘杖で頭を支えたまま芋のニョッキばかりを作業のようにのろのろと口に運んでいた。ジョッキの中身は酒ではなく、蜂蜜をこれでもかというほど入れた香草茶だ。
「んー、あたしも一寸、今日は飲む気になんないわ」
いつも陽気なヴィーナスが、今日はチキンをちびちび齧りながらぼそりと言う。ジョッキの中はなんと、ただの水。
「え。んじゃそのチキン貰っていい？」
「なんでよ。飲む気になんないっつっただけで、食べないとは言ってないし」
「ちぇ」
いつも食卓で熾烈な争奪戦を繰り広げるジュピターとヴィーナスだが、今日は随分と大人しめだ。
「……ねぇ」
ヴィーナスは頬杖をついて、食べ終わった鶏の骨をぷらぷらと振りながら、ぽつりと言った。
「もし、あたしが死んだら。誰か、お祈りとかしてくれる？　今日みたいに」
「どうしたんだよ、急に」
なんか変なもんでも食ったか、と、少しぎょっとしたようにジュピターが問う。

「なんとなく、よ。…で、どうなの、お祈りとかしてくれるわけ？」
「んー……そりゃ、わかんないな」
「あー、そう」
溜息をつくヴィーナス。一瞬、瞳に暗い影が過ぎる。
「だってさ、ヴィーナスが死ぬとか、それ相当ヤバい状況だろ。あたしだって生きてるかどうかわかんないじゃん」
「そうね。私もたぶん、魔力切れになってるだろうし」
たぶんお祈りどころじゃないわね、とマーキュリー。
「……マーズは、あれだな。多分ブチ切れるだろうな」
何も言わないマーズの代わりに、ジュピターが言う。
「敵に向かって『お前ら全部燃やす』とか言いそう」
「そうね。マーズって意外と人情家だから」
「それ以上言ったらあんた達のそのお喋りな舌を燃やすわよ」
不機嫌そうに言うマーズに、ジュピターはおお怖い怖い、と戯けて肩を竦めた。
「ヴィー、あんたもあんまり縁起でもないこと言うんじゃないわよ」
マーズはじろりとヴィーナスを睨む。
「こんな商売やってたら命なんか幾つあっても足りないんだから、洒落になんないわ」
「あー……ん、ごめん」

ヴィーナスは小さく笑って、そう言った。

＊

草木も眠る、丑三つ時。

ヴィーナスは滑るように寝床から抜け出すと、静かに黒革のジャケットを身に着け、腰に短剣を帯び、懐に投げナイフを忍ばせた。仲間達は誰も、目を覚ます気配はない。互いに信頼しきっているからなのか、余程疲れているのか。恐らく、両方だろう。

身支度を整えたヴィーナスは、忍び足でマーズの枕元へと歩み寄った。それでなくても顔を晒して街を歩けないほどの美貌だが、窓から差し込む仄かな月明かりがその美貌を際立たせている。

ヴィーナスは暫しその寝顔を見下ろしていたが、やがて徐（おもむろ）に屈み込み、唇をそっと彼女のそれに寄せた。

わしっ

マーズは不意に、近づいてきたヴィーナスの顔を右手で鷲掴みにすると、

ぎりぎりぎりぎりぎりぎり

彼女の両頬に爪を思い切り食い込ませた。

「いいいぎぎぎぎぎぎぎ!?」

「寝込みを襲うとはいい度胸ね」

起き上がったマーズは、余程力を入れていたのか、肩で息をしながらヴィーナスを睨みつける。
「うう……マーズちゃん、容赦ない……ってか、なんでバレたの？　隠密行動はあたしの十八番なのに」
凹むわぁ、と、ヴィーナスはマーズの爪が食い込んだ頬を元に戻すように両手で揉みながらぼやいた。
「起きてたからよ。あんた、この街に着いてからずっと様子がおかしかったし」
こんな事だろうと思ったわ、と、腕組みをして、マーズ。
「そんなに見ててくれたの？　あたしのこと」
「そんなに見なくても、近くに居りゃ猿でもわかるわ。食欲あるのに水だけしか飲まないとかおかしいでしょ、どう考えても」
「だったらよ？　キス位いいじゃない……お餞別だと思って許してよ」
苦笑するヴィーナス。
「そんなに餞別が欲しいなら」
マーズは溜息を一つつくと、自分が首に掛けていたペンダントを外した。ヘッドに付いている宝石は、恐らく魔力を帯びているのだろう。血のように鮮やかな赤色をしていることが暗闇の中でも判った。
「これを持っていきなさい」
人差し指でくいくいと促され、ヴィーナスは自分の頭を差し出した。

「……行くな、って。言ってくれないの？」
「言ったってどうせ行くんでしょ」
マーズはそのペンダントを自分の手でヴィーナスの首に掛けてやりながら、突っ慳貪にそう言った。
「絶っっ対失くすんじゃないわよ」
「……ん」
仄かに紅く光る石を暫し見つめていたヴィーナスは、やがてそれを大事そうに胸元へ収めると、ありがと、と泣きそうな顔で小さく笑い、踵を返した。
そして、窓辺でほんの一瞬後ろを振り返り、
「ばいばい、マーズ」
そう言って窓を開け放ち、ひらりと身を翻して夜景の中に消えていった。

「……ったく」
暫くの間、ヴィーナスが開け放った窓の向こうを見つめていたマーズは、深い溜息をつくと、自分もベッドから抜け出し、薄い夜着からいつものローブに着替えた。
そして、窓辺に歩み寄り、
「――『探知（ロケーション）』」
印を切り、呪文を唱える。古代魔法王国の術者達の編み出した、捜し物の魔法である。

「……あの馬鹿」
マーズは眉を顰めて、夜の空を見上げた。
満月よりも僅かに痩せた丸い月が、天頂で煌々と輝いている。
「どこまで行く気よ」
ヴィーナスの――厳密には、ヴィーナスの首に掛かっているペンダントの――気配は、どんどん遠ざかっていた。マーズは舌打ちを一つして、再び印を切り、呪文を唱える。先刻の捜し物魔法よりも長く、複雑な呪文だ。
「――『飛行（フライト）』」
力ある言葉の完成とともに、マーズの体がふわりと浮く。
彼女は先刻ヴィーナスがそうしたように開いた窓から身を踊らせると、高速で風を切って飛翔し、夜の空へと吸い込まれるように消えていった。

「……二人とも、行ったな」
ジュピターが、むくりとベッドから起き上がった。
「ったく。ほんと世話の焼ける奴らだね」
そうね、と小さく笑って、マーキュリーも起き上がる。
「で、あたし達はどうやって追いかけんの？」

いつもの板金鎧（プレートメイル）ではなく硬革鎧（ハードレザー）を着けながら、ジュピター。元傭兵なだけあって、戦支度の手際が良い。

「私達は空は飛べないから、普通に地面を歩いて行くしかないわね」

マーキュリーは法衣を纏い、身支度を整えると、両手で印を切って呪文を唱えた。

「――『探知（ロケーション）』」

先刻マーズが唱えた、捜し物の魔法と同じものだ。

「……少し急ぎましょう」

呪文を唱え終えた彼女は、ジュピターにそう言って、部屋の扉を開けた。

＊

ドンロンの街の南に広がる森には、丸い形の草地があり、なぜかその部分だけ木が生えずにぽっかりと穴があいたようになっている。古代魔法王国時代に行われた魔法実験の影響が残っているせいだとの噂があるが、真実は謎である。

「あらぁ、ディーテちゃん。ちゃんと来てくれたのねぇ」

ヴィーナスが草地の中に進み出ると、木立の影から、女が一人姿を現した。体の線をくっきりと際だたせる衣装に、盗賊風の装備を身に着けている。

「逃げちゃうかと思ったけど」

「……カタリナ……姐さん」
カタリナと呼ばれた女は、マホガニー色の髪を指先でくるくると弄びながら、いい子ね、と微笑んだ。
「俺もいるぜ」
と、カタリナが出てきたのとは反対側の木立から、背の高い男が現れた。こちらも盗賊風の出で立ちである。
「ジンタ……変わってないね、二人とも」
「ディーテは変わったな」
蜂蜜色の髪に甘いマスク、筋肉質の逞しい体つき。役者にでもなれば一躍売れっ子になりそうな風貌だが、
「腑抜けた顔しやがって。冒険者ごっこは楽しかったか？　あぁ？」
なにぶん柄が悪い。ヴィーナスは少しむっとして、
「そういえば、地下水道であたし達の後をつけて来た奴が石人形にドブに落とされてたけど。ジンタ、もしかしてあれ、あんただった？」
しっぺ返しを食らわせる。
「っ……、調子に乗んなよ、てめえ」
「やあ。元気そうで何よりだね、ディーテ」
別の木立の陰から、男がもう一人現れた。黒髪の優男風で、鎧は身に着けていないようである。

「！　……アランまで……」
ヴィーナスは溜息をつくと、掌を上に向け、観念したように肩を竦めた。
「……で、あたしをどうする気？　指を詰める？　目玉を抉る？　それとも……さくっと殺す？」
「おいおい、勘違いしないで欲しいな。僕らは君を制裁しに来たわけではないんだ。……まあ、確かに」
アラン、と呼ばれた男は、そう言って、
「領主夫人直々の暗殺依頼だというのに、君は妾腹の赤ん坊を殺すどころか、誰が命を狙っているかまでご丁寧に相手に教えてやって、そのまま逃亡した。ギルドへの裏切りフルコースだね」
くつくつと喉の奥で笑う。
「とにかく、あの一件で我らが暗殺ギルドは領主夫人の不興を買ってね。頭領以下直属の幹部は軒並み逮捕、即日処刑、おかげでギルドは壊滅さ。故に君への制裁もチャラになったってわけだ」
「……だったら、何で？　あたしに何の用？」
「それはね」
眉を顰めるヴィーナスに、カタリナが答える。
「あなたを迎えに来たのよ。私達のつくる新しい組織に」
「……は？」
「は？　じゃねぇよ」
苛立ったようにジンタが口を挟んだ。

「ギルドが潰れたからって、今更堅気になれるかよ。俺らも食うために仕事しなきゃなんねぇんだ。罪滅ぼしにてめぇも協力しやがれ」
まあまあ、と宥めるように、アラン。
「ギルドが潰れて、何も悪いことばかりじゃないさ。……例えば、頭の悪い老害どもに指図をされることもなければ、報酬をピンハネされることもない」
そう言って、彼はヴィーナスに歩み寄った。
「ね？　昔みたいに、また皆で暮らしましょう？」
カタリナもヴィーナスに歩み寄る――間合いを詰める、と言った方がいいだろうか。
「……もし、だけど」
ヴィーナスは息を呑んだ。
「嫌だ、って言ったら、どうなるの？」
「うん、それは想定の範囲内だね。でも」
アランはそう言って、素早く印を切り、呪文を唱える。マーズがいつも使っている古代語魔法のそれによく似ているが、ヴィーナスには聞き覚えのないものだった。
「『禁忌（ギアス）――汝、我が命に背く勿れ』」
アランの指先がヴィーナスの額に触れようとした瞬間、ぱちっ、と乾いた音が響く。
「あいたっ」
眉を潜めて額を撫でるヴィーナス、目を見開くカタリナ。

「っ、なんだと⁉」
驚愕し、硬直するアラン。
ジンタはむすっとしたまま腕組みをして突っ立っている。
ずごごごごっ！
「ぐあっ！」
「っぐっ！」
「むっ⁉」
「ひぇっ⁉」
不意に、炎の奔流がヴィーナスを囲む三人を襲った。ジンタとカタリナは、着衣に燃え移った火を消そうと地面を転がる。アランは自らの抗魔力をもって、マントの一払いで纏わりつく炎を霧消させた。
「畜っ生……誰だ！」
四人が一斉に、炎の矢が飛んで来た方を振り返る。
「マーズ⁉　何で……っ」
呆然と呟くヴィーナスの視線の先にはマーズが、いつもの黒ローブを纏い、カンテラを手に立っていた。
「ムカつくからよ。何もかも」
マーズは端正な顔に苛立ちを露わにして、長い黒髪を後ろに払う。

「何も言わないで出ていこうとするあんたにもムカつくし、余所のパーティーの盗賊を勝手に引き抜こうとする連中にもムカつくし、何より」
そして、二人の男の服装を見比べると、魔術師と思しき方の男を睨みつけた。
「魔法の力で他人の自由を奪って支配しようとする奴には、反吐が出るほどムカつくわ」
「あの…マーズ、えっと、これは」
「何も言わなくていいわ。あんた達の話、全部聞いてたから」
魔術師を睨んだまま、マーズ。
「……ああ。そういえば」
アランが片方の口角を上げ、歪んだ微笑を浮かべた。
「精霊魔法には、盗み聞きの魔法があると聞いたことがあるな」
風の精霊（シルフ）の魔法のことだ。
「精霊使いに似つかわしい、品のない魔法だね」
棘のある物言いに、マーズの眉がぴくりと跳ねる。
「へっ。馬鹿め、魔術師の癖にのこのこ一人で現れやがって。女だからって容赦しねぇからな――ぐあっ!?」
腰のショートソードに手を掛けて凄むジンタを、光の矢が撃った。
「魔術師の癖に、とは聞き捨てならないね」
古代語魔法で、攻撃したのはアランだ。

「まるで魔術師よりも君の方が優れているような物言いじゃないか。二度とそんな口を聞かないで欲しいね。それから、彼女は魔術師ではなく精霊使いだよ。高度な学問である古代語魔術を、精霊と交信し使役するなどという原始的な魔法と一緒にしないでくれたまえ」

膝をつき歯を食いしばって、すまねぇ、と呟くジンタを、アランは侮蔑的な微笑を浮かべて見下ろす。

マーズの眉がまた、ぴくりと跳ねた。

「……で？　ヴィー、あんたはどうすんの。そいつらのところに戻りたいわけ」

マーズは腰に手を当て、斜に構える。

「さっきあいつがあんたにかけようとした魔法、ね。『禁忌（ギアス）』っていって、相手に何かを禁止する呪いをかける術よ」

「えっ」

ヴィーナスは目を見開いた。

「一旦かけられたら、あいつが自分から解かない限り効果は永久に続くし、あいつが死んでも解けない厄介な魔法。それで『俺の命令に逆らうな』って命じれば、何でも言うことを聞く操り人形の出来上がり。あんた、もうちょっとであいつの奴隷にされるところだったわよ。……まあ、あいつの魔力よりあんたの抗魔力の方が上だったから」

効かなかったけどね、と、マーズは険しい顔のままアランの方をちらりと見た。

魔術師の眉が、不快にぴくりと跳ねる。

「……」
ヴィーナスは無言で、マーズの言葉を必死に理解しようとしていた。
――あの、優しかったアランが。
皆から一歩引いたところで、困ったように笑っていた彼が。
自分を、奴隷のように支配しようとした？
（信じられない……でも）
先刻の出来事を思い出す。アランは躊躇なくジンタに魔法を撃ち、侮蔑的な言葉を投げかけた。そしてジンタはそれを甘んじて受け入れた。あの、負けん気が強くて俺様気質のジンタが。
（ジンタも……魔法で縛られてる、たぶん）
――カタリナは、どうだろうか。
アランのそんな暴挙を、黙認しているのか。それとも、カタリナもアランに支配されているのか。まさか――アランと同じように、他人を支配する側なのか。任務を投げ出して逃げた自分を憎んではいないか。アランと同じように、自分を支配しようと思って――
「……まあ」
マーズの声で、ヴィーナスは思考の水底から呼び戻された。
「あんたが本気であいつらのとこに戻りたい、って言うなら。私はこのまま大人しく帰るけど」
「何言ってやがる。俺達の顔も名前も知られちまった以上、生きて帰すわけねぇだろ。それに」
ジンタが苛立ちを露わに、ショートソードを抜いた。

「さっきのお返しもしねぇとな……切り刻んでやるから覚悟しろ」
「そうねぇ。悪いけど、あなたは色々知りすぎたわ。私達のことも、ディーテのことも」
カタリナはのんびりとした口調でそう言って、緩やかに波打つ髪をかき上げ。
「だから――死んで頂戴」
その指にナイフを挟み、身構える。
戦いの火蓋が切って落とされた。
「『大地の精霊ノーム、逞しきその両手もて、彼の者どもに縛（いましめ）を』」
二人の刃がマーズに届くより先に、彼女の呪文が完成する。暗殺者達の足元が盛り上がり、岩がその脚を呑み込んで自由を奪った。
「なんだこりゃ、動けねぇ！」
「くっ……！」
カタリナの投げたナイフが、マーズの黒髪を掠めた。下半身が岩に呑まれた状態では狙いが上手く定まらず、威力もない。
「ちっ！　『万物の根元マナよ、我が手に集い、稲妻となりて――』」
「『風の乙女よ、彼の者に一時の沈黙を！』」
アランが呪文を唱えるが、舌打ちの分、マーズの詠唱の方が一瞬速い。
そして、その一瞬が明暗を分ける。
「――！」

アランの発する声はおろか、衣擦れの音も、枯れ葉を踏む音も、全てが封じられる。金魚のようにただぱくぱくと口を動かす様は、滑稽にも見えた。
「あんた達はちょっと黙って。……で、ヴィー」
マーズはヴィーナスを見た。
ヴィーナスはひゅ、と息を呑む。
「あんたはどうしたいわけ？　昔の仲間のところに帰りたいのか、それとも私達と一緒に旅を続けるのか」
「あたしは……」
ヴィーナスは声を震わせ、泣き出しそうに顔を歪めた。
「あたしは……わかんない……だって、カタリナもアランも、まだ子供だったあたしの面倒みてくれて、優しかったよ……ジンタはバカだし、偉そうで意地悪でウザかったけど」
おいてめぇ！　と後ろの方から抗議の声が飛んでくる。
「……質問を変えるわ」
溜息をついて、マーズ。
「『今の』あんたは『今の』あいつらと一緒にいたいのか、それとも、私達と一緒にいたいのか」
「『今の』……」
ヴィーナスは、かつて仲間達と過ごした日々を思い出す。
（……ああ）

カタリナを姉さん姉さんと慕い、埃っぽい屋根裏の隠れ家で、二人体を寄せ合い、ぼろ布にくるまって眠った日々。

（あの頃のあたしが、もういないみたいに）

殺しの仕事で得た雀の涙ほどの報酬で、石のように堅いパンを買っては皆で分け合った日々。アランは、自分はあまり役に立っていないからと言って、時々パンを余分に分けてくれた。ジンタとは最後の一切れをどちらが食べるかでよく喧嘩をしたものだった。

（あの頃のみんなも、もういないんだね）

「……でも、あたしなんかが……」

ヴィーナスの脳裏に、昼間の出来事が蘇る。

大蛇に食われて死んだ冒険者の剣を放り投げて、マーズに怒鳴られたこと。あの時初めて、死んだ人間の持ち物は丁重に扱わなければならないのだと教えられた。

それに、見ず知らずの子供の死を悼み、ごく自然に頭を垂れ、祈りを捧げる仲間達の姿。人の死を悼むどころか人を殺すのが仕事だった自分とは、歩いて来た道が違いすぎる。

「あたしみたいな人間が、マーズ達と一緒にいていいのかな」

「答えになってないわ」

マーズの口調が厳しくなる。

「私はあんたがどうしたいか聞いてるの。良いか悪いかは聞いてない」

「だって！　あたし殺し屋だよ⁉　あたしたちの話聞いてたんでしょ⁉　マーズの一番嫌いな種類の

人間でしょ!?」
　悲鳴のように、ヴィーナス。
「何よ。あんた、私の目を盗んで殺しの仕事やってたわけ？」
「やってないってば！　そういうことじゃなくって！」
「じゃあ関係ないわ、『今』やってないならね。私は『今の』あんたの話をしてるの。あと私の好みも勝手に決めないで」
　マーズは呆れたように溜息をついて、
「もう一回聞くわよ。あんたは、どうしたいの。『今の』あんたは」
　ちゃんと言いなさい、と言い付けた。
「……あたしは……」
「ほら」
「……今が、いい。今のままが」
　ヴィーナスは逡巡しながら、やっとのことでそう呟く。
「誤魔化さないでちゃんと言いなさい」
「……みんなと、一緒に行きたい」
「みんなって誰よ」
「……マーズと……ジュピターやマーキュリーと、一緒にいたい」
「声が小さい！」

「マーズ達と一緒にいたい！」
「もっと大きな声で！」
ヴィーナスは大きく息を吸って、
「マーズ達と！　一緒に！　いたいです！」
腹に力を入れ、目一杯に叫んだ。
「ちゃんと言えるじゃない」
月明かりの下、ふん、と鼻で笑ったマーズがほんの一瞬見せた笑みは、見たこともないほど優しくて。
ヴィーナスは、鼻の奥がつんとして泣きたくなるような感覚を覚えた。
「……そろそろ魔法が解けるわ。あんたは下がってなさい」
昔の仲間とは戦えないでしょ、と、マーズはそう言ってヴィーナスの肩をぽん、と叩いて前に進み出る。
「ううん、大丈夫。自分のことだから、自分でけじめ付けなきゃ」
ヴィーナスはかぶりを振って、ショートソードを抜いた。
「……来る！」
大地の戒めが解け、二人の暗殺者がマーズを目掛けて突っ込んでくる。
「死ねえぇぇぇっ！」
「『大地の精霊ノーム、石の拳もて彼の者どもを打て』！」

マーズの呪文に応えて、地面から飛び出した無数の石礫（いしつぶて）が暗殺者達を打った。石同士がぶつかる音が、石が彼らの防具を、身を打つ音が、一瞬の轟音となって木々の間に木霊（こだま）する。

「がっ！　ぐ、ふ」

男は額から血を流し、胸を押さえてその場にがっくりと膝をついた。

「っ、この程度――」

一瞬怯んだ女は、すぐに体勢を立て直して投げナイフを構えた。狙うのは、マーズの首筋。

「っ！」

ナイフが放たれるより先に、女は横に跳び退く。

次の瞬間、彼女が蹴った地面に、別のナイフが突き刺さった。

女は腰の鞘から得物を抜いた。鍔がなく、針のように細い刀身を持ったそれは、暗殺者が好んで用いるものだ。

ぎぃんっ！

金属同士が激しくぶつかり合う音。カタリナの匕首（あいくち）を、ヴィーナスの剣が弾いた。

「……やっぱり、こうなるのね」

カタリナが苦笑する。

「うん……ごめん、カタリナ姉さん。やっぱり」

姉さん達と一緒には行けない、と、ヴィーナスも苦笑した。

「これで二回目ね。ディーテちゃんに裏切られるのは」
「っ、」
ヴィーナスが息を詰まらせた瞬間、カタリナの匕首が空を薙ぐ。
「……そ、だね」
斬られたヴィーナスの金髪が、月明かりにきらきらと輝きながら宙を舞った。
「だから、もうみんなの所には戻れない」
曖昧に微笑むカタリナ、
「今からでも、遅くないのよ？」
小さくかぶりを振るヴィーナス。
「あたし、知っちゃったんだ。お日様の下を歩くのが気持ちいいこととか、人殺しじゃなくて人助けをして貰ったお金で食べるご飯の味とか。だから」
「そう。残念だわ……でも」
カタリナは一歩引いて、再び匕首を構える。
「ディーテちゃんは優しいから。私のこと、殺れるかしらね」
「……わかんない。姉さんは？　あたしを殺れる？」
「さあ」
ひゅんっ！
「どうかしらね」

再びカタリナの匕首が空を薙ぎ、
「結構良い線、いけそうだけど」
跳び退るヴィーナスの頬に一筋、血が滲んだ。

「んっ、のっ野郎！」
ジンタがショート・ソードを振り下ろした。
「『大地の精霊ノーム』」
マーズが退がる。剣圧で、鼻先がひやりとした。
「『石の拳もて彼の者を打て』」
詠唱が速い。
「がっ！……ふ、」
ジンタが刀を返すより先に、石礫が彼を打ち、地面に叩き伏せる。
「やれやれ」
アランは肩をすくめて頭を振った。
「精霊使いごときを相手にこの有様とはね。ジンタ、君は本当に使えないな」
嘲笑混じりにそう言うアランに、マーズの顔が険しさを増す。
「ちょっとあんた。いくら何でも仲間に言うことじゃないでしょ」

「……仲間？」
アランは地に伏したままのジンタを一瞥すると、ふん、と鼻で笑って。
「仲間とは、対等な関係においてのみ成立するものだろう？　残念ながら、僕と彼は対等ではない。彼は僕に使役される立場だ」
そう言い放った。
「カタリナも苦戦しているようだね。まったく、困ったもんだ」
「……」
マーズは黙り込む。
マジギレ五秒前の顔で。
「ご主人様の手を煩わすとは。仕方ない飼い犬だね」
アランはやれやれ、と大仰に肩を竦めると、
「『万物の根元マナ、我が手に集い』」
印を切り、呪文を唱えた。
「『光の矢となりて貫け』！」
古より伝わる古代語の呪文に応え、現れた光の矢は二本。
一本は、マーズに向かって飛翔する。
マーズは仁王立ちで、険しい顔で相手の魔術師を睨み据えたまま、微動だにせず、瞬きもせず、自らの抗魔力でその矢を弾いて元のマナへと還した。

もう一本は、カタリナと対峙するヴィーナスを射た。
「っ！」
光の矢は、ヴィーナスに当たった瞬間雲散霧消した。正確には、目に見えない障壁に遮られるように、ヴィーナスに当たることなく弾かれたのだ。魔法の矢がヴィーナスを傷つけることはなかったが、反射的に目を閉じてしまったヴィーナスに僅かに隙が生まれたのを、カタリナは見逃さなかった。
「うわっ、とぉ！」
大きく横に跳び、くるりと受け身を取って再び立ち上がるヴィーナス。あと一瞬遅ければ、カタリナの匕首がヴィーナスに刺さっていた。
「っ、馬鹿な！　僕の魔法が――」
「よく避けたわね」
うふふ、と、口元だけで笑うカタリナ。
「うん、あたしもよく避けれたなと思う」
ショート・ソードを構え直すヴィーナス。
二人の眼中に、アランは入っていないようだ。
「ヴィー！　あいつの魔法は当たっても何てことないから無視しなさい！　目の前の相手にだけ集中して！」
「おっけ、わかった！」
ヴィーナスはカタリナから目を逸らすことなく、マーズの指示に威勢良く答えた。

「なっ!?」
アランの顔が驚愕の色に染まり、
「何故だ……どいつもこいつも……僕を愚弄する……！」
みるみる憎悪に歪んでゆく。
「いいだろう、せいぜい後悔するんだね！」
そして、両手で印を切り、
『――雷撃（ライトニング）』！」
稲妻を、ヴィーナスめがけて撃ち込んだ。
「っ、」
また、ほんの一瞬ではあるが目を閉じるヴィーナス。無視をしろ、と言われても、例え痛みは感じなくとも、攻撃を仕掛けられればつい反応してしまうものだ。
まずい、と思った瞬間。
「ぁぐっ！」
カタリナは短い悲鳴を噛み殺し、その場にがっくりと膝をつく。革ジャケットの背中が焼け焦げ、異臭を放っていた。アランの雷撃は、射線上にいたカタリナを巻き込んだのだ。
「姉さん!?　そんな、何で……」
ヴィーナスは混乱する。
自分は今、カタリナと戦っている。

そしてアランも、自分に攻撃を仕掛けてきた。
そのアランが、カタリナを魔法で撃った。
ではアランは一体、誰の味方なのか？
「！　馬鹿な！　なぜだ！　なぜ効かない!?」
「はぁ!?　あいつ馬鹿なの!?」
混乱するアラン、驚愕するマーズ。
「くそっ！　……くそっ、くそっ、くそっ……！」
アランは再び両手で印を切り始める。
マーズは、彼が何をしようとしているかを瞬時に悟った。
「『風の乙女（シルフ）よ、あいつを黙らせて！』」
マーズの呼びかけに応え、一陣の風がアランに向かって吹きつける。
「『万物の根元マナ、空気を変えよ』」
アランは気を集中させて風の精霊の干渉を弾き飛ばし、呪文の詠唱を続けた。マーズは咄嗟に、ローブの袖で顔を隠す。
「『全てを溶かす強酸の雲に』！」
「うぐぁっ！」
「あぁぁぁっ！」
暗殺者達の悲鳴が、夜の森に木霊する。

『強酸の雲』は、文字通り敵の周囲に強酸性の雲を発生させ、着衣、鎧、武器、人体、あらゆる物を溶解する魔法だ。その場にいる者を無差別に殺傷し、しかもその遺体は見るも無惨な姿となるため、良識ある魔術師達の間では禁呪扱いされている。

「っ……！」

さしものマーズも全くの無傷とはいかず、酸で焼かれて酷く爛(ただ)れた右手を押さえ、小さく呻いた。辺りには異臭が立ちこめている。酸そのものの匂いに、布が、革が、皮膚が、肉が、強い酸の霧で溶かされた匂いが入り混じったその臭気に、彼女は思わず吐き気を催して口を覆った。周囲を見渡せば、つい先刻まで再び立ち上がろうと藻掻いていたジンタが、変わり果てた姿となって横たわっているのが見える。

「姉さん!?」

悲鳴のような、ヴィーナスの声。

まったくの無傷で立っている彼女の目の前に、カタリナが倒れ伏していた。――本当にカタリナなのかどうかは、わからない。伏しているのか仰向けなのかも判別できない、人型の肉の塊がそこにはあった。

「カタリナ姉さん！」

ヴィーナスは先刻まで彼女と刃を交えていたことも忘れて駆け寄り、その傍らに跪いた。

「！　何故だ！　何故、倒れない！　それなら――」

アランは地団太を踏み、また呪文を唱え始める。

「っ、いい加減に――」
マーズが再び精霊に呼びかけようとしたその時、
ごっ！
「はぐぁっ！」
鈍い音がして、アランの悲鳴が聞こえた。
「ひぃぃぃっっ、ひぃぃぃぃっっっ！」
半狂乱で喚き散らしながら、地面をのたうち回るアラン。
「マーズ！　ヴィーナス！　大丈夫⁉」
木立の陰からマーキュリーが叫びながら駆けてくる。
「ちょ、何で――」
何故ここに、と問おうとして、マーズははっとした。彼女がここにいるということは、ジュピターも一緒の筈だ。
「――ジュピター！　そいつは殺さないで！　楽に死なせてたまるもんですか！」
咄嗟にマーズが叫ぶ。今にもアランに斬りかかろうとしていたジュピターは、すんでのところでマーズの声を聞き届けて剣を収めると、足下に落ちた投げ斧を拾い上げ、暴れる男を取り押さえた。
「マーズ。これ、どういう状況？」
「……倒れてる二人は、ヴィーナスの昔の仲間。で、やったのはあの男……あいつも、ヴィーナスの昔の仲間」

マーキュリーの問いに、マーズは簡潔に答えつつ、泣きながらジュピターにしょっぴかれてよたよたと歩く男を顎でしゃくった。マーキュリーは死体の傍らに茫然自失でへたり込むヴィーナスの姿を見て、ああ、と小さく呟く。

「っていうか、なんでここに居るのよ」

「捜し物が得意なのはマーズだけじゃないってこと」

マーキュリーはそう答えると、マーズの右手が酷く焼け爛れているのを見咎め、その手を取って呪文を唱えた。

「『――傷つきし者に癒しの恵みを与え賜え』」

マーズの用いる古代語魔法とも精霊魔法とも異なる音韻と韻律を持つそれは神聖魔法と呼ばれ、神に仕える者が神の奇跡を具現化するものである。

「それから。『偉大なる智神ラーダ、彼女の内に吹き荒れる激情の嵐を鎮め賜え』」

マーズの肌が元通りに治ったのを見届けて、マーキュリーが続いて用いたのは『静心（サニティ）』の術。対象となる者の興奮を静め、落ち着かせる効果がある。

「マーズは人情家だから。怒りに任せて誰かを断罪したら、きっと後悔すると思うわ。例えそれが極悪人でもね」

「……そうかもね」

全てお見通しの神官に、マーズは観念したように溜息をついた。

「じゃあ、これはサービス。『偉大なる智神ラーダ、我が精神の力を彼女に分け与え賜え』」

マーキュリーは更に呪文を唱えた。今度は『精神力付与（トランスファー）』、魔法を用いるために必要な精神力を、自らの精神を削って相手に分け与える魔法である。マーズは消耗しきっていた精神に再び力が宿ったことを感じ、驚きに目を見開いて仲間の神官を見た。

「冷静な時のマーズなら間違った判断はしないって、全面的に信頼してるから。思うようにすればいいと思うわ」

そう言って微笑むマーキュリー。おそらく彼女は、マーズが何をしようとしているかもお見通しなのだろう。

「……恩に着るわ」

マーズは照れ隠しのように殊更突っ慳貪に呟いた。

「おーい。とりあえず、こいつ捕まえて来たぞ」

深手を負い、喚きながらもたもたと歩くアランを、ジュピターがやっとのことで連れて来た。

「くそっ……なぜ僕がこんな目に遭わなければならない……ぐぁ！」

ジュピターは男の両手を後ろ手に締め上げたまま、その背中をぐいと膝で押し、地べたに跪かせる。

「悪いわね。手間を取らせて」

「お？　いつも人使いの荒いマーズが珍しい」

茶化すジュピターを睨めつけて、マーズは深い呼吸を一つした。

「『生命の精霊よ、その神秘の力もてあらゆる傷を癒せ』」

そして、彼女の呼びかけに応え、アランの体に宿る生命の精霊が彼の負った深い傷をたちどころに

癒す。
「何のつもりだ？　これで僕に恩でも売ろうっていうのかい」
アランは餓鬼のような形相で、振り乱した髪の間からマーズを睨み上げた。
「……あなたの命を奪うのは簡単だけど、あなたの犯した罪に対して、何の反省も贖罪もないまま死を与えるのは、どうしても納得がいかない」
マーズは狂気をはらんだアランの視線に一歩も退かず、ただ静かに見つめ返しながらそう言うと、深い呼吸を一つ落とし、覚悟をを決したように言葉を継いだ。
「だから、あなたの魔法を封じさせて貰うわ。今後二度と、いかなる魔法の力も使えないように――それが恐らくあなたにとって、死ぬよりも苦しいことでしょうから」
「はっ!?　何を、精霊使いの分際で。僕の魔法を封じるだと？　何を馬鹿な――」
アランの嘲笑を聞き流し、マーズは精神を統一すると、おもむろに呪文を唱え始めた。
「『万物の根元マナ。我が手に集い、枷となれ』」
アランの目が驚きに見開かれる。マーズの唇が紡ぐそれは、紛れもない古代語魔法の呪文――それも、かなり高度なものだ。
「っ!?　ばかな！　精霊使いが何故……！」
「『我が定めし禁忌を犯すこと、ゆめゆめ能わぬよう。彼の者の精神を縛り、肉体を戒める枷に』」
流れるように、謡うように紡がれる古代語の呪文。滑らかに、舞うように、正確に形作られる手印。全てに無駄がなく、全てが美しく。ただただ愕然とする男に、魔術師としての格の違いを見せつける

ように。

「『我が命により解かれぬ限り、永遠に解ける事なき軛（くびき）となれ』」

「っ！　やめろ！　やめてくれ！」

アランは逃れようと力一杯藻掻くが、ジュピターに押さえつけられた体は動かない。

「頼む！　嫌だ！」

恐怖に歪む男の額に、マーズの指先が触れた。

「『禁忌（ギアス）――汝、いかなる魔法の力も用いること勿れ』」

呪文が完成した瞬間、アランはマーズの指先から不可視の力が体に流れ込むのを感じた。

「うおぁぁぁぁぁっ、あぁぁ……」

熱いような、痺れるような感覚が頭を満たし、背骨を駆け抜け、四肢の隅々にまで行き渡り、フェードアウトしていく。

「……ジュピター、もういいわ」

マーズの言葉通りにジュピターが手を放すと、アランは脱兎のごとく逃げだし、先刻取り落とした杖を掴んだ。

「くそっ！『万物の――』ぐぁっ!?」

そして古代語の呪文を唱えようとした途端、彼を激しい苦痛が襲う。魔法の行使に必要な精神集中どころか、立っていることも、息をすることすらも叶わない。

「くっ、ばかな……っ！」

詠唱しかけては苦痛にのたうち回ることを繰り返していたアランは、やがて諦め、重い体を引きずるようにして森の奥へと姿を消した。

「ヴィーナス」
マーキュリーは、放心して座り込んだヴィーナスと、カタリナの骸を挟んで向かい合うように跪いた。
「お祈りさせて貰っても、いいかしら」
「……お祈り……して、くれるの？」
ええ、と頷いて、マーキュリーは改めてカタリナの遺体を見た。強酸で溶けた着衣の断片が体に貼り付き、皮膚は赤黒く焼け爛れ、顔はもはや判別できない。『酸の雲』が禁呪扱いなのも頷ける――そんなことを考えつつ、彼女はカタリナの両手を胸の上で組ませてやると、自分の短上衣（ボレロ）を脱いで、その顔の上に掛けた。
「――人の身これ儚きものにて、誰しも、その魂を肉体に宿らせ現し世に生を受け、瞬く間に滅び、魂一つに戻るものなり」
夜の森に、厳かな祈りの声が木霊する。
「ヴィナ」
俯くヴィーナスの横に、ジュピターが来た。

「あのさ。あたし、死んだ人って、生きてる奴がその人のことを思って流した涙の分だけ、あの世で幸せになれるって、聞いたことがあるんだ」
黙ったままのヴィーナスに、ジュピターは横顔で語りかけ、
「あたしらは、この人のこと全然知らないからさ。今この人のために泣いてやれるの、ヴィナだけじゃん？　だから」
――できるだけ沢山、泣いてやりな。
そう言って、ヴィーナスの頭にぽん、と手を乗せた。
ヴィーナスの目から、大粒の涙がぽろり、と零れて。
「……うっ、」
抑えきれない、嗚咽。
「うわあああああああああ！」
あとは、堰を切ったように、声を上げて、誰憚ることなく。
ヴィーナスは泣いた。
マーキュリーの祈祷が終わっても、ただひたすらに、死者を想い、涙枯れるまで。

＊

「ヴィー」

カタリナとジンタ、二人の埋葬を終えたところで、マーズはヴィーナスに向かって右手を差し出した。
「さっきの餞別返して」
「えー……せっかくマーズちゃんからのプレゼントなのに……」
ぶー、と可愛らしく唇を尖らせてみせるヴィーナスだが、そんなことで絆されるマーズではない。ヴィーナスは渋々、首に掛けたペンダントを胸元から取り出した。魔力を帯びた深紅の石が、夜の闇の中で妖しく光る。
「！　……ヴィーナス、ちょっとそれ、よく見せて」
意外にも食いついたのはマーキュリーだ。
「これは……」
マーキュリーはその紅い石をしげしげと見つめ、
「ヴィーナス。これ、そのまま貰っておけば一生遊んで暮らせるかもよ」
冗談半分にそう言った。
「えっ、ちょっ、何？　どゆこと？　……これ、そんなに凄いものなの？」
ヴィーナスは動揺を隠せない様子で、マーズとマーキュリーを交互に見た。
マーキュリーは悪戯ぽく微笑み、マーズは余計なことを言うなといわんばかりにマーキュリーを睨めつけている。
「これは魔法への抵抗力を高める護符だけど、ここまで強力なものは、見たことは勿論聞いたことも

ないわ。これを身に着けていれば、大抵の魔法は跳ね返せるでしょうね」
　持ち主のマーズが黙っているので、マーキュリーは自分の見立てを述べる。
「現代の技術ではとても作れないし、古代魔法王国でもこれほどの物を作れる魔術師は滅多にいなかったでしょうね。とても値が付けられるものではないけれど、強いて言うなら……」
「……言うなら？」
　ごくり、とヴィーナスが唾を呑む。
「大きめのお城を一つ二つ買って、お釣りが来るくらい……かしら？」
　マーキュリーはそう言って、マーズをちらりと見た。マーズが何も言わない、ということは、マーキュリーの見立てが概ね合っているということだろう。
「ひぇっ」
　ヴィーナスは青ざめた顔で息を止め、
「無理無理無理！　遊んで暮らせるどころか生きた心地しないわ！」
　慌ててペンダントをマーズの手に握らせた。
「さて……それじゃ、帰りましょうか」
　マーズはペンダントを自分の首に掛けると、うん、と伸びをしてそう言った。
「いや。今からみんなで虎退治に行くよ」
　と、ジュピター。
「はぁ!?」

「えぇぇっ!?」
マーズとヴィーナスの声が綺麗にハモった。二人の驚く顔を、ジュピターがニヤニヤと笑いながら眺めている。
「ちょっ、何、どういうことよそれ！」
疲労の色を浮かべて気怠そうにしていたマーズが食ってかかる。
「依頼を一件引き受けておいたの。城壁の外に出るのに、理由が必要だったから」
涼しい顔で、マーキュリー。
「いくら冒険者でも、理由もなしに、しかも夜中に外に出るとなると、再入国の時に面倒なの。ちなみに、マーズとヴィーナスの出国手続きは代わりにやっておいたから。貴女達、戻る時のこと全然考えてなかったでしょ。密出国した人間がそう簡単に城門をくぐれる筈がないのに」
「いや、あたしはそもそも戻らな……何でもないです」
ヴィーナスは勝ち目がないとみて早々に白旗を上げる。
「〜〜っ、わかったわよ！　やりゃいいんでしょ！　やりゃ！」
理路整然と突きつけられて、マーズはキレ気味にそう言った。
「……普段人使い荒い奴が、人使いが荒いってキレてる」
ぼそり、とジュピター。
「何か言った!?」
「いや、何も？」

いつもの仲間の、いつものやり取り。
ヴィーナスは小さく笑って、
「ま、しょうがないじゃん。とっとと終わらせて帰ろ？」
いつものように、その輪に加わった。

夜はまだ、終わらない。

――ＭＭＧ５・終

セーラームーンRPG⑧　　ＭＭＧ５
著　深森薫

2023年　4月　　初版（PDF）

発行者　　Bitter ＆ Sweet （深森薫）
http://mimorikaworu.yomibitoshirazu.com/